インタビュー

歴史的危機を超えて

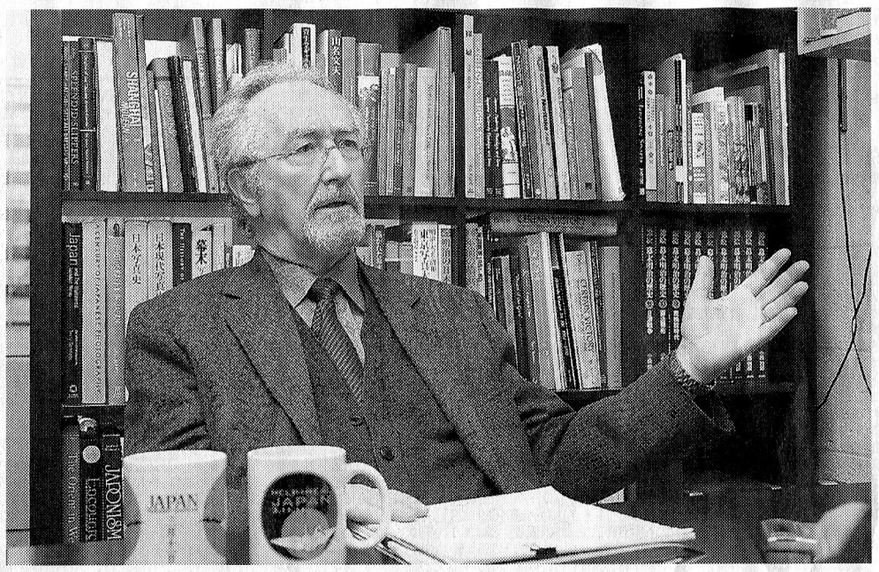
オピニオン

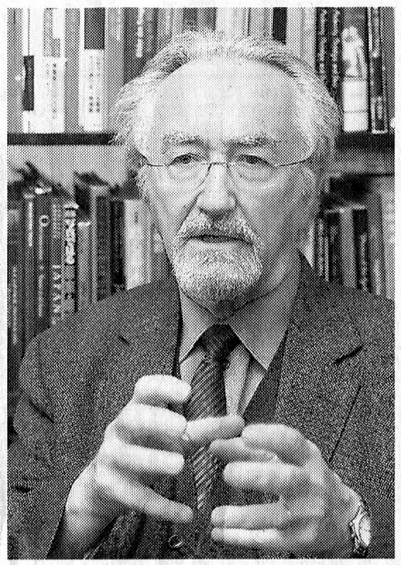
いたるところに雨ニモマケズの心しなやかな強さ

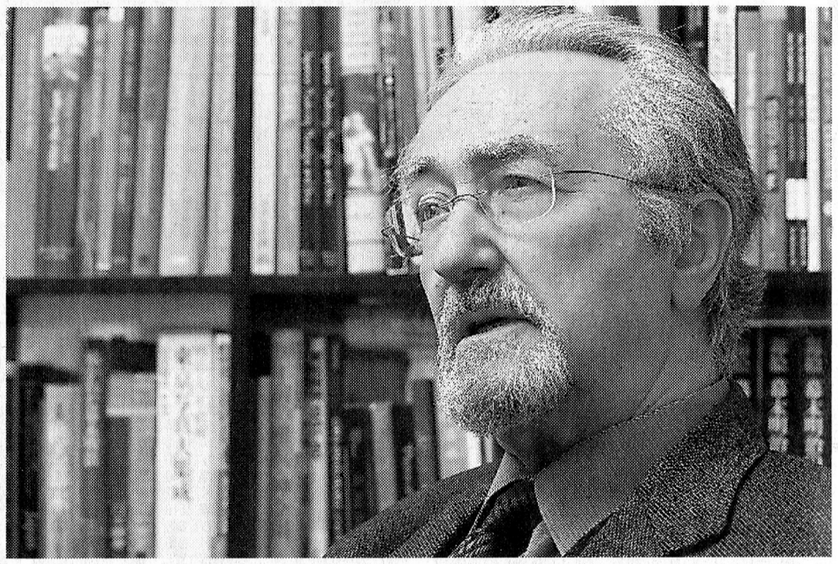
東日本大震災の爪痕をみると、空襲で破壊し尽くされた66年前の光景に重なり合う。焼け跡から新国家を建設したように、今回もわれわれは力を合わせて国難を克服できるだろうか。ピュリツァー賞受賞作「敗北を抱きしめて」で、第2次世界大戦の破滅から立ち直る日本人の姿を描いた米国の歴史家、ジョン・ダワー氏に聞いた。

米国の歴史家　ジョン・ダワーさん

38年生まれ。米国を代表する日本史研究者。マサチューセッツ工科大名誉教授。著書に「吉田茂とその時代」「容赦なき戦争」など。







まず取り出したのが「日本を助けよう」と書かれたマグカップだった＝米マサチューセッツ州、坂本真理氏撮影

——震災から1カ月半が過ぎました。米国での受けとめ方はどうでしょうか。

「オバマ米大統領から日本への励ましのメッセージや、政府の公的声明だけではありません。チャリティーコンサートを開く音楽家もいれば、日本を応援するメッセージを入れたカップを販売し、売り上げを寄付する陶芸家もいます。著名人から草の根のレベルまで、米国社会はいまも日本に対するシンパシーであふれています」

「地震の発生直後から、米国のテレビはぶっつづけで、日本の映像を流しました。高さ20㍍以上もある巨大な水の壁が町をのみ尽くす。米国人がよく目にするハリケーンや洪水などの自然災害とはまったく違う、信じられない映像でした」

——それにしても映像の力は大きいですね。

「テレビで伝えられている東北のふつうの人々の姿が、見る者の心を動かします。家を失い、肉親を亡くしても、じっと耐えている被災者の姿や、パニックを起こすことなく、規律を守っている様子が、尊敬の念を集めているのです」

■　■

——菅直人首相は今回の大震災を第2次世界大戦以来の最大の危機ととらえています。

「おそらくそうでしょう。地震に津波、福島第一原発の事故まで加わった複合的な危機になっています。しかしそれでも、第2次世界大戦が引き起こした人命の損失と物的破壊の規模は、日本の国内だけに限っても、今回の震災よりすさまじいものでした。被爆地の広島、長崎だけではありません。それ以外に日本中の64の都市が空襲で破壊され、すべてあわせると、40万人から60万人が空襲で犠牲になったと言われています。数百万人が家を失いました。さらに外地から引き揚げてきた数百万人には、ほとんど職がありませんでした。日本の国富の4分の1から5分の1が失われました。日本はいったい復興できるのだろうか。日本が大国になることはもう二度とないだろう。当時はそう言われていたのです」

「第2次世界大戦の前には、1923年の関東大震災がありました。首都を直撃し、日本の政治・経済の中心が壊滅し、10万人以上が犠牲になりました。しかし、日本人はその廃虚から公園、近代的ビル、地下鉄のある巨大都市として東京を再生させたのです。このふたつの歴史経験が私たちに教えるのは、日本人は悲劇から新しい創造的なものをつくり出すことができるということです。今回の東北の悲劇からも、同じように立ち直ることを期待しています」

■　■

——今回の大震災の後、どのような日本になると思いますか。

「いまだに危機は進行中であり、全体の状況を判断する材料もありませんが、いくつかの可能性があります。ひとつは、この大災害が世界の共感を引きつけていることを、どう生かすかということです。いま世界中の人々が日本の苦境に気持ちを重ね合わせているのではないでしょうか。結局、われわれは同じ人間なのだ、みんな同じ人類なのだという感覚です。貧しい途上国もなけなしの財政から日本に支援を寄せ、日ごろは日本と必ずしも友好的でない国の人々も日本を応援しています。一国に対する同情的感覚がこれだけ広がったのはめったにないことです」

「問題は、この現象がどれだけ続くのか、ということでしょう。この感覚があるうちに他国との連帯をどう築くのか。これが日本にとっての課題です。かつての教科書問題や領土問題が再び起きて、過去と同じような緊張関係に戻ってしまうのか。それとも日本外交は、信頼構築の新しい次元に入れるのでしょうか」

——国内も変わっていくでしょうか。

「私が注目しているのは、日本のいたるところで、助け合いやコミュニティーの感覚が生まれていることです。困っている人をなんとか助けたいと若者たちが考え、被災地でボランティアをしている。そこにあるのは、宮沢賢治が残した詩『雨ニモマケズ』にあるような質実で献身的な精神です。自分のことだけでなく、コミュニティーのことを、責任を持って考えています。これまで批判されてきた攻撃的で対立的なナショナリズムとはまったく別物でしょう。この問題意識を伸ばして、日本をどのような国にすべきか、そういう議論に発展させてほしい。90年代のバブル経済の崩壊以来、日本は自信を失って、心理的に暗かった。しかし、今回の危機で明らかになったのは、日本社会のしなやかな強さでした」

ふつうの人々も「原発」議論重ね世界引っ張る力に

■　■

——ダワーさんが「敗北を抱きしめて」で描いた占領期の日本の姿に通じるものがあるのでは。

「本は当初、『打ちのめされた国で最初からやり直す』（Starting Over in a Shattered Land）というタイトルで考えていました。敗戦直後は、親や夫などの家族を失った人々が日本中にあふれていました。家もないし、職もない、何もかも失った人々が、よりよき生活を求めて必死に日本を再建したのです。政府だけではありません。あらゆるレベルで信じられないほどの活気あふれる精神がありました。その精神を、日本人はその後の繁栄の中で失ってしまった。ふつうの人々が政治に積極的に発言する、そんな参加型民主主義の精神を取り戻してほしいと思います」

——具体的には、日本はどのような課題に取り組むべきでしょうか。

「大震災が起きた3月11日の前に日米両国がもっぱら考えていた危機は、核兵器とミサイルを開発している北朝鮮からくるものでした。しかし、実際の核の脅威は、外からだけでなく、自分の内にもあったのです。被爆国である日本が、原発事故という形で新たに放射能の恐怖に襲われたことは、これは歴史の悲劇的な巡り合わせとしか言いようがありません」

「日本は国策としてどんどん国内に原発を建設してきました。原発はクリーンで安全なエネルギーだから、温暖化防止にも役立つとされていました。原発を推進する側に透明性が欠けていたり、安全神話にあぐらをかく傲慢さがあったりしたとは思いますが、まじめに原子力エネルギーを推進しようとしていたのは事実です。問題は、この事故を受けて、エネルギー政策をどう考え直すかということです。いままでの議論は幅が狭かった。原子炉をどう守るかという議論ばかりしていましたが、今回の使用済み核燃料の問題は、『使用済み』という言葉と裏腹に、非常に危険で取り扱いに注意を要するものだということも分かりました。原発の安全を根本から考え直さねばなりません」

——世界でも議論が広がっています。

「福島第一原発の事故は日本にとっての悲劇ですが、世界の危機でもあります。事故をきっかけに、世界中の人々が原発を考え直すことになったからです。今回が単なる一回限りのアクシデントで、将来はもっと安全な原発の建設が可能なのでしょうか。それとも、原発依存から脱して、代替エネルギーの開発に大きく踏み込むべきなのでしょうか。官僚や電力会社任せにせず、一般の人も加わるボトムアップで議論を重ねるべきでしょう。広島、長崎の経験を踏まえて、核軍縮の議論を日本が引っ張ってきたように、今回の危機を生かして、エネルギー政策でも指導的役割を果たしてほしいと思います」

——震災後の日本の政治をみると、はたしてそうした改革や議論を進める体力があるのか不安です。

「個人の人生でもそうですが、国や社会の歴史においても、突然の事故や災害で、何が重要なことなのか気づく瞬間があります。すべてを新しい方法で、創造的な方法で考え直すことができるスペースが生まれるのです。関東大震災、敗戦といった歴史的瞬間は、こうしたスペースを広げました。そしていま、それが再び起きています。しかし、もたもたしているうちに、スペースはやがて閉じてしまうのです。既得権益を守るために、スペースをコントロールしようとする勢力もあるでしょう。結果がどうなるかは分かりませんが、歴史の節目だということをしっかり考えてほしいと思います」

取材を終えて

ダワー教授の研究を貫くのは、具体的な個々人への思いである。占領期を描くときでも、吉田茂やマッカーサーといった高みからだけではなく、新聞の投書欄や子どもの遊び、流行歌などを材料に人々の心のひだに入っていく。津波の映像に「心がつぶれるようだった」と話していたが、そこに一人ひとりの命が見えたからだろう。（論説委員・三浦俊章）